

森のちやれんがニュース

2020夏

Newsletter vol.20



第17回企画テーマ展『楽器 見る・知る・考える』オンライン公開

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、本企画展はオープンを断念しました。会場にお客様をお迎えすることはできませんでしたが、北海道博物館ウェブサイトにて、展示室の360度写真や解説動画を公開しています。

1つ目の章「見る」では、北海道博物館が所蔵する楽器が並びます。現役で使われていた当時の、さまざまな状況を想像させてくれます。

次の章「知る」で紹介するのは、シカ笛研究の第一人者である枡谷隆男さんのコレクションを中心とした楽器や音具。音具とは、音を出す道具のことですが、その音を出すしくみは楽器を考える上でいろんなヒントを与えてくれます。

最後の章「考える」は、世界の音具や楽器について。普段あまり目にする事のない不思議な楽器だけでなく、リコーダーや尺八などおなじみの楽器についても紹介しています。

北海道博物館では初めての試みのオンライン企画展。ぜひご覧いただき、音の文化の世界に触れてみてください。

(学芸員 渋谷美月)



解説動画より



CONTENTS

- ① 収蔵資料紹介
社会人野球の強豪
「たぐん (北海道拓殖銀行)」
- ② 総合展示資料紹介
ヒグマとサケ、キツネ、カラスの関係は？
第5テーマ「生き物たちの北海道」の動物たち
- ③ 研究活動紹介
木村捷司による壁画「開拓」をめぐって
- ④ 臨時休館をきっかけにはじめた「おうちミュージアム」ってどんな取り組み？
- ⑤ だれもが利用しやすい博物館を目指して
一館内の施設設備の改修について
- ⑥ 活動ダイアリー
2020年3月～2020年5月の記録

収蔵資料紹介

社会人野球の強豪「たくぎん(北海道拓殖銀行)」

会 田 理 人

研究部生活文化研究グループ 学芸主査

2017年の第3回特別展「プレイボール！ 北海道と野球をめぐる物語」の準備を進めるなかで、たくぎん(北海道拓殖銀行)野球部OB会から一括資料の寄贈を受けました。

北海道を代表する都市銀行だった「たくぎん」には、社会人野球の強豪というもうひとつの顔がありました。1960年代後半から80年代にかけて、全国大会出場権をめぐり、「5強」と呼ばれた北海道の社会人野球チームの一角を占めるとともに、全国屈指の実力をもつチームとしてプロ野球選手も輩出するなど、北海道社会人野球を牽引するチームでした。

ここでは、たくぎん野球部の歴史をひも解きながら、たくぎん野球部の活躍を物語る貴重な資料をご紹介します。



たくぎん野球部の創部は1950年。歴史ある都市対抗野球大会への初出場は1957年のことでした。札幌市代表として出場回数は20回を数え、1976年の第47回大会では準優勝し、白獅子旗(準優勝旗)を獲得しています。

もうひとつの全国大会、社会人野球日本選手権大会には10回出場しました。1975年の第2回大会に初出場できなり準優勝を果たし、さらに78年の第5

回大会では初優勝を果してダイヤモンド旗(写真1)を獲得するなど、輝かしい戦績を残しました。



チームの戦績を物語る優勝旗や優勝杯、選手のユニフォームなどに加えて、興味深いのが1956年に誕生した応援団の資料です。

都市対抗野球大会のもうひとつの見どころは、出場チームの華やかで工夫を凝らした応援合戦でした。たくぎんは、銀行のシンボルフラワーをテーマにした「スズラン娘」が有名でした(写真2)。第35回大会(64年)及び第47回大会(76年)の応援団コンクールでは最優秀賞を獲得するなど、素晴らしい歴史を誇りました。

たくぎんの愛すべきマスコットキャラクターといえば、「くまのたくちゃん」。

ノベルティグッズの「たくちゃん貯金箱」のシリーズでも、チームの活躍と歩調を合わせるように、野球を楽しむたくちゃんが多数誕生しました。たくちゃんは、応援団の一員となって(写真3)、また、応援旗のシンボルとして(写真4)、選手を鼓舞しました。



たくぎん野球部は、1996年の都市対抗野球北海道地区予選の敗退をもって活動を停止し、廃部となりました。かつて、たくぎん野球部の本拠地「平岡球場」があった場所は、大型ショッピングモールへと変貌しました。

すでに寄贈を受けている、他のたくぎん関連資料と合わせて、今後も総合展示のクロズアップ展示や企画テーマ展などで、活用していきたいと考えています。



写真3 着ぐるみのたくちゃん(頭部)



写真4 たくちゃんが選手を鼓舞する応援旗

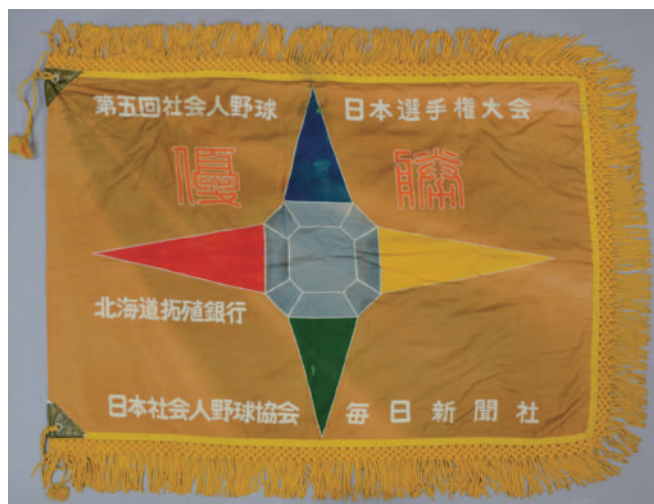


写真1 第5回社会人野球日本選手権大会優勝旗(ダイヤモンド旗)

写真2 たくぎん応援団と「スズラン娘」
第47回都市対抗野球大会(1976年)での応援の様子

総合展示資料紹介

ヒグマとサケ、キツネ、カラスの関係は？

第5テーマ「生き物たちの北海道」の動物たち

水島 未記

自然研究グループ 学芸主幹

総合展示の第5テーマ「生き物たちの北海道」では、さまざまな動物の剥製、乾燥標本、レプリカ（複製）などを組み合わせて展示を構成しています。ここでは、展示のコンセプトと絡めて、そのうちいくつかをご紹介します。

地域の自然史を展示で表現するための切り口はいくつか考えられますが、この展示では対象を生物に絞り、さらに、単に「こんな動物がいる」「こんな植物がいる」と示すのではなく、「食う—食われる」の関係（食物網）など、生き物同士の関係性にフォーカスを当てることにしました。これを〈つながり〉という単語で表現し、展示全体を貫くコンセプトワードとしています。

剥製などの標本類は北海道の海や川・海岸などの環境をイメージした情景展示の中にありますが、実はそのレイアウトにも意味があります。〈つながり〉のある生き物同士を近くに配置し、剥製などの姿勢も〈つながり〉を意識したものとなっているのです。

例えば、入口から正面の奥の方に見えるヒグマの仔。口元には大きなサケ（レプリカ）がいます。サケはまだ生きていて体を踊らせていますが、仔グマはせっかくのごちそうを逃がすまいと、しっかりくわえています。どうやら、繁殖のため川に遡上してきたオスのサケを捕まえた瞬間のようです。この後、体の美味しい部分から食べはじ

めるのでしょう。

一方、近くの木の下には、仔ギツネがたたずんでいます。その視線の先をたどると、先ほどのサケに向いているのがわかります。ヒグマは多くの場合、サケの体のうちかなりの部分を残します。キツネにはヒグマとケンカして食べ物を奪うだけの力はありませんが、その食べ残しは大事なごちそう。ヒグマが去った後、そそくさとサケに近づいてかじりつく姿が想像できます。

生き物同士の〈つながり〉をめぐるドラマはこれだけでは終わりません。実は、後ろ側にはハシブトガラスが隠れています。キツネがさらに食べ残した「おこぼれ」を狙って、じっと待っているのです。

サケの体を食べるのは獣や鳥だけではありません。実際の野外では、死んだサケが河原にあると、ハエがどこからともなく飛んできて卵を産みつけます。すぐに孵った幼虫は、あっという間にサケの身を食べ尽くし、骨と皮だけが残されます。その様子は、仔グマより下流側にあるサケの死体（レプリカ）で見ることができます。機会があったら体をめくってみてください。

サケは、さまざまな動物たちに利用された後で菌類や細菌によって分解され、あるいは動物たちの糞をつうじて、川のまわりの植物が育つ栄養となります。ヒグマやキツネはサケを運んでから食べることもあるため、川から離れ

た森にもサケの栄養は届くことになります。川で生まれ、海で大きく成長して戻ってくるサケは、海と森の〈つながり〉の中で重要な役割を果たしています。

このほかにも、地面の上にいるクロテンは、樹上のエゾリスを見つけてこれを狙っています。カケスは、ミズナラの堅果（どんぐり）をくわえて飛び、離れた場所で落ち葉の下に隠そうとしています。また、クマゲラが止まっている枯れ木には、材の内部にムネアカオオアリという大形のアリが潜んでいます。クマゲラはこのアリが好物で、これを食べに来ているのです。

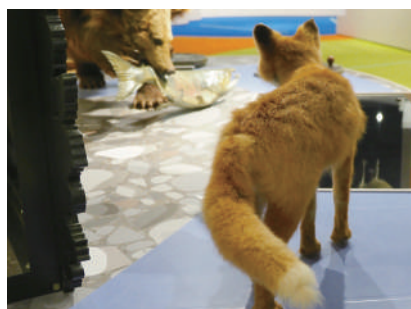
林床に横たわるエゾシカや、海岸に打ちあげられたネズミイルカも、それぞれ何か別の生き物に食べられているのがわかるのでしょうか。死んだ動物も、〈つながり〉の重要な出発点になるのです。

よく観察すると、きっと、まだまだ発見がありますよ。次に当館を訪れた時は、ぜひ、隣り合って置かれている動物たちに注目してみてください。そして、どんな関係なんだろう？ 何をしているシーンなのかな？ と、想像をめぐらせてみてください。

本号発行時点では、サケの死体のレプリカなど「さわれる展示物」は新型コロナウイルス感染拡大防止のため体験いただけない状態になっています。自由に体験いただける状況になってからお楽しみください。



サケを捕まえた仔グマと……



その食べ残しを狙う仔ギツネと……



そのさらに食べ残しを狙うハシブトガラス

研究活動紹介

木村捷司による壁画「開拓」をめぐって

田中 祐未

研究部歴史研究グループ 学芸員



1991年北海道生まれ。北海道地図株式会社勤務（グラフィックデザイン担当）を経て、2018年より当館学芸員。専門は美術史。写真は、北海道博物館総合展示室内の壁画「開拓」を単眼鏡で見ている様子。

博物館内でおこなう研究活動

2020年が始まって少し経ったころ、新型コロナウイルスの問題がニュースに取り上げられるようになりました。今年は、北海道博物館の外で調査などをおこなう機会は例年よりも減りそうですが、その分、館内で腰を据えて研究する1年にしたいと考えています。今回は、当館が所蔵する資料の研究についてご紹介します。ここでは、私が担当している美術分野の事例を取り上げます。

総合展示室の巨大壁画「開拓」

（写真1）は、総合展示室2階にある壁画「開拓」です。大きさは、なんと高さ4.5m×幅18m。幅2mのパネル9枚をつなぎ合わせて一枚の絵ができています。北海道博物館の前身・北海道開拓記念館が1971年に開館するにあたって、展示物のひとつとして制作されました。

重要なことは、この絵が、ある時点、ある地点の、一瞬の光景を表現したも

のではない、ということです。舞台設定は明治後期の上川地方ですが、決まった場所から見た風景ではありません。人々（この絵の設定では東北や北陸などからの移住者）が、木を切り倒し、土を耕していく時間の流れを、画面左から順に展開させています。制作にあたっては、参考資料（開拓の記録写真や、農具の実物など）を開拓記念館側から提供し、画家自身も道内各地で取材を重ねました。一枚で開拓のようすを説明できる展示物となることを目指した、ということでしょう。写真ではなく、絵だからこそできることです。

この絵は、来年（2021年）で、制作から50年が経ちます。上述したような展示物としての役割のみならず、この絵自体、一点の歴史的な資料として捉えることができます。この時期に、いまわかる限りの情報を集め、壁画と一緒に将来に引き継ぐことが必要だと考えています。北海道博物館に保管された、制作委託にかかる資料を読み込ん

だり、制作当時のことを知るご家族や元職員にお話を伺ったりして、情報をまとめているところです。

また、この絵を1点の美術作品として見たとき、「何が描かれているか」ということだけでなく、「どのように描かれたのか」にも、目を向ける必要があります。そのためには、絵筆の運び方に着目するなど、詳細に作品を見る必要があります。北海道の美術史において重要な作品という意味でも、研究を進めていきたいと考えています。



この絵を描いたのは、函館出身の洋画家・木村捷司（1905-1991、以下「木村」）です。木村は、幼少期に家族とともに樺太に移り住みました。1923年、北海道大学予科医類に入学しますが、画家になることを志し、1927年に東京美術学校に入学し直します。卒業後は函館に戻り、後に七飯に移って制作を続けました。生涯を通して現地取材を重視する制作態度をとり、樺太に住む北方民族を描いた作品をはじめとして、国内外各地に住む人々の肖像や、生活のようすを描いた作品などが多く残されています。

開拓記念館の壁画制作の依頼も、「昭和四十五年六月、南欧の旅からパリへ着いたとき」に家からの手紙によって知ったのだと、木村本人が語っています*1。壁画は翌年（1971年）3月に、開拓記念館に納品されました。

（写真2）は、壁画「開拓」制作のた

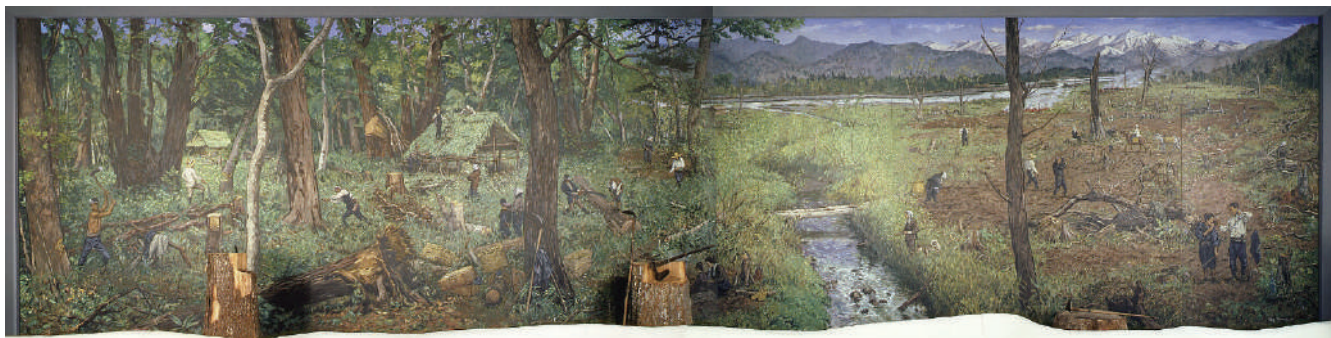


写真1 収蔵番号：113515 壁画「開拓」 油彩・カンヴァス 1971年 ※写真は過去に開拓記念館常設展示室で撮影されたもの。



写真2 収蔵番号：159224
壁画「開拓」の画稿 木炭・紙 1971年



写真3 壁画「開拓」の一部抜粋

めの画稿のひとつで、北海道博物館の収蔵庫に保管されています。絵の左下には、こう書かれています。

「開墾地風景壁画／第八面中景画稿
一九七一年／S. Kimura [捷]」

総合展示室で壁画を観察すると、左から8枚目のパネルに、この絵とそっくりな部分を見つけました。それが(写真3)です。さらに、壁画制作中のアトリエを写した(写真4)を参照したところ、中央に、(写真2)の画稿と酷似した絵があることもわかりました。

木村が、壁画制作に携わった職員に宛てた手紙^{*2}(1971年1月13日)には、「すでにモデル習作も完了し、全画面に構図を拡大転写し終り、目下は第一～第四パネルを同時に彩描中です。小道具類やコスチュームなど凝りはじめると案外の時間を取りますが、大画面であつてもやはり芸のこまかいところを見せる必要があるので、手を省かずに仕事をやりとげます。」とあります。

「モデル習作」とは、(写真4)にあるような、個々の人物の絵のことを指していると推測されます。紙面の関係で写真を載せられませんが、モデルにポーズをとらせた写真も残っています。

(写真5)(写真6)は、構図を決めるための画稿です。この記事のために、馬が描かれた部分を抜粋しました。(写真5)では馬のすぐ後ろに木が描かれているのに対し、(写真6)では、馬の後ろにはもう一頭の馬が続いており、完成形に近い状態になっています。馬や人物など細かな部分の検討だけでなく、全体のバランスに関わる構図についても、検討を重ねたということがわかります。

今後は、これらの写真や壁画の実物をよく照らし合わせながら、より詳細な分析を行っていく予定です。みなさんに報告できるよう、日々コツコツと研究を積み重ねていきます。

北海道博物館にお越しの際は、ぜひ、総合展示室でじっくりと壁画を鑑賞してみてください。

*1 北海道新聞1986年2月26日付、木村捷司、北の語りべ 辺境に求める画人 572

*2 木村捷司から廣田基彦宛の手紙



写真4 壁画「開拓」制作中のアトリエに貼られた画稿 木村捷司記念室提供
中央に(写真2)と思われる画稿が写りこんでいる。
左下に写りこんでいるのは、壁画全体の構図を決めるための画稿で、高さ1m程度の大きさに見える。



写真5 壁画「開拓」の画稿
木村捷司記念室提供



写真6 壁画「開拓」の画稿
木村捷司記念室提供

臨時休館をきっかけにはじめた 「うちミュージアム」ってどんな取り組み？

渋谷 美月

研究部博物館研究グループ



うちミュージアム特設ページ

新型コロナウイルスの影響で、幼稚園や学校は長期休校や分散登校などが実施され、外出も自粛しなければならぬ状況となり、多くの子どもたちがうちで過ごす時間が長くなりました。全国の多くの施設同様、北海道博物館でも2月29日より臨時休館と再開館を繰り返しています(5月26日より開館中)。

そんな状況をきっかけにはじめた取り組みが「うちミュージアム」です。博物館に来てもらうことは叶わなくても、これまで研究や展示、イベントでやってきたことを生かして、子ども達がうちで楽しく学べる時間を過ごしてもらおうと、工作や遊び、レシピなどをオンラインで提供しています。3月4日に北海道博物館ホームページ内で特設ページを公開した翌日から、全国の博物館や美術館、科学館などに声をかけ、「うちミュージアム」という冠を共有し、よりわかりやすくワクワク

する形で、多くの方にお届けできるように、まとまって情報発信しています。

同じ頃あるいはそれ以前から、臨時休館中の取り組みを始めていたミュージアムもあり、「うちミュージアム」への参加は予想を上回るスピードで続々と増えていきました。3月には計33館参加し、4月にはミュージアム同士の口コミや広い地域のメディアに取り上げてもらった影響もあってか、118館にまで増えました。現在は200館を超え、特設ページの一覧から各ミュージアムにアクセスできるようになっています(6月時点)。

博物館や資料館、美術館や企業ミュージアム、自然・生物系のセンターや動物園、あるいは施設を持たない市町村の教育委員会など、いろんな背景を持つ幅広い分野のミュージアムが共同で情報発信できるプラットフォームとして「うちミュージアム」が生かされています。こんなにも長く見通しの

立たない臨時休館や、開館しても制約があり普段通りにお客さんを迎え入れられない状況は、どこのミュージアムでも初めての経験です。この状況の中でも…この状況だからこそ、ミュージアムは何をどのような形で発信できるか、参加ミュージアム同士お互いに参考にしながら、取り組んでいます。今後「うちミュージアム」をどう展開していくかということも、他のミュージアムと意見交換しながら考えていきたいと思っています。

「うちミュージアム」の難しいことのひとつは、インターネットで自由に利用できる形のためお客さんの反応を受け取りにくいことです。楽しんでもらえているかな？と気になって、SNSなどで調べています。子どもや親子だけでなく、大人の方も使ってくださいようです。直接連絡をいただいたところや他のミュージアムから聞いた例では、小学校のオンライン宿題や学童保育所の学習でも活用していただいています。こういうときに、すぐに声を聞けるようなお客さんとの関係づくりもこれから大切にしていきたいなと感じています。

学校休校と臨時休館をきっかけに始まった「うちミュージアム」ですが、北海道博物館の常時の取り組みとして、参加ミュージアムのみなさんと一緒により良い形を探りながら継続していきます。

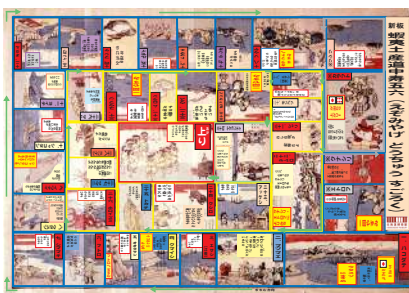
「うちミュージアム」特設ページ

www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/ouchi-museum/

北海道博物館提供の工作などがダウンロードできます。全国の「うちミュージアム」の一覧もこちらから。ぜひチェックしてみてください。



北海道地名しりとり
第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」でおこなった体験展示をうちで遊べるサイズにアレンジ



松浦武郎がつくったすごろく
「新板蝦夷土産道中寿五六」
(1864(元治元)年刊 北海道博物館蔵)に
現代語訳をつけて

だれもが利用しやすい博物館を目指して 一館内の施設設備の改修について

圓 谷 昂 史

総務部企画グループ 学芸員

鈴 木 明 世

総務部企画グループ 研究職員

2015（平成27）年4月に開館した北海道博物館は、2019（令和元）年度に来館者50万人を迎え、多くのお客様に北海道の自然・歴史・文化を紹介してきました。同時に、この5年間、お客様からいただいた当館の施設設備や展示等へのご意見を参考に、だれもが利用しやすい博物館を目指し、できる限りの改善に努めてきました。ここでは、2020（令和2）年の3月に実施した、館内の設備改修についてお伝えします。

今回は、「だれも見やすく、より安全に博物館を利用していただけること」を目的に、①トイレの場所を示す表示（以下、トイレ表示）と、②階段の段鼻（階段のへりの部分（以下、階段））の2つの改修を行いました。まず、

トイレ表示については、「表示が小さくてトイレがどこにあるのかわからない」という意見が多かったため、表示の方法を統一し、表示パネルの大きさを拡大しました（写真1、2）。次に、階段では、「階段の色が灰色1色のため、段差がわかりにくい」という意見を受け、へりの部分にこげ茶色の強力な粘着シートを貼り、一段一段が見えやすくなるようにしました。（写真3）。

また、これらの改修では、専門機関等に現地調査を依頼して意見をもらい、館職員とともに課題を整理・協議することで、“だれも見やすく”かつ“博物館の雰囲気合う”デザインや色調とすることを目指しました。今回は、北海道札幌視覚支援学校、北海

道カラーユニバーサルデザイン機構等にご協力をいただきました。さらには、北のミュージアム活性化実行委員会が当館を会場に開催した研修会「視覚障がいに対応した博物館づくりにむけて」の講師及び参加者からもご意見をいただきました。

今回の改修は、館内のごく一部の改修であり、劇的な利便性の向上を生むものではありません。加えて、この他の施設設備や展示についての課題も、依然、多く残されています。北海道博物館はこれからも、より多様なお客様をお迎えすることができ、だれもが安全かつ楽しく、利用しやすい博物館となることを目指し、取り組みを進めていきたいと思います。



写真1 1Fホールの女子トイレと多目的トイレの表示改修（左：改修前、右：改修後）



写真2 1Fホールのトイレ表示改修後の様子



写真3 階段の段鼻（へり）にシートを貼った様子

活動ダイアリー
2020年3月～2020年5月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

2月29日(日)～3月31日(日)

■新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館。

3月4日(水)

■「うちミュージアム」を北海道博物館HPに開設。担当：渋谷美月。

3月25日(水)

■北海道博物館研究紀要第5号、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第5号を刊行。

3月26日(木)

■森のちゃれんがニュース2020春号 (Vol. 19) を刊行。

3月27日(金)

■令和元年度北海道立総合博物館協議会を開催。

4月11日(土)

■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聴こう」を開催。担当：水島未記・堀繁久・表溪太・自然ふれあい交流館スタッフ。

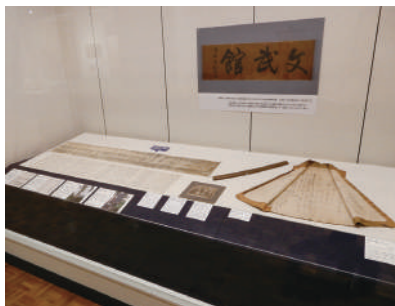


■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。

①近世文書を読む ①フラッシュ・コレクション



②新選組の元幹部隊士 永倉新八



③伝承者が生きた近現代 平賀サダさん



④灰場武雄さんがつくったトンコリ (五弦琴)



⑤岩手県から北海道へ渡った神楽



⑥みんなが夢になった子ども雑誌



⑦北海道のいろいろなカタツムリ



4月14日(火)～5月24日(日)

■新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館。第17回企画テーマ展「楽器」開催中止。

5月1日(金)

■「うちミュージアム」プレゼント企画を開始。担当：渋谷美月。

■第6回特別展「恐竜展2020」開催中止決定。

5月2日(土)～5月24日(日)

■新型コロナウイルス感染拡大防止のため野幌森林公園内の駐車場を閉鎖。

5月19日(火)

■「バーチャル北海道博物館」を北海道博物館HPに開設。

5月26日(火)

■新型コロナウイルス感染拡大防止の対策を整備し、開館。

人事異動

退職 (3月31日付)

〈副館長〉齊藤文俊、〈研究部長〉右代啓視
 〈学芸部博物館基盤グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究職員〉田村雅史
 〈学芸部社会貢献グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究職員〉大谷洋一
 〈総務部企画調整グループ兼研究部博物館研究グループ学芸員〉村上孝一
 〈学芸部道民サービスグループ解説員〉麻生典子
 〈総務部総括グループ主査〉鈴木健介、〈総務部総括グループ主査〉杉村直樹
 〈学芸部博物館基盤グループ兼研究部歴史研究グループ学芸員〉右代啓視
 〈学芸部社会貢献グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究職員〉大谷洋一
 〈副館長〉小野寺誠司、〈総務部総括グループ主査〉三國正雄
 〈総務部総括グループ主査〉三井義也

転出 (3月31日付)

再任用 (4月1日付)

転入 (4月1日付)

来館者数

○2020年3月(臨時休館)

総合展示室 0人 特別展示室 0人 はっけん広場 0人

○2019年度合計

総合展示室 78,579人 特別展示室 61,650人 はっけん広場 17,122人

○2020年4月～2020年5月(4月14日～5月24日臨時休館)

総合展示室 1,455人 特別展示室 1,873人 はっけん広場 0人

○累計(2015年4月～2020年5月)

総合展示室 517,288人 特別展示室 388,040人 はっけん広場 120,784人

森のちゃれんがニュース 第20号

発行日：2020年6月30日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

 ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2020